

HBV ワクチンが無効な HBV 株の存在とその escape 現象の分子生物学的解析

(消化器内科)

静岡 徹

〔目的〕臨床検体の解析から、a-loop 変異株が、HBs 抗体から逃れることが推測されている。そこで a-loop 変異株の HBs 抗体からの escape 機序を、分子生物学的に解明することを目的とした。

〔方法〕肝細胞で複製可能な野生株、変異株のコンストラクトを、in vivo では C57/BL6 の肝被膜下、in vitro では Huh7 細胞に transfection し、その後 in vivo では腹腔内、in vitro では培養上清中に抗体を添加し、HBs 抗原・抗体価を EIA 法で測定した。

〔結果〕in vivo, in vitro 両方の実験で、野生株は変異株に比べ、HBs 抗体投与後に s 抗原値の低下が顕著であった。

〔結果〕a-loop 変異株は HBs 抗体からの escape 機能を有すると考えられた。

ラット膵外分泌調節における一酸化窒素の役割

(消化器内科)

上野秀樹

〔目的〕ラット基礎膵外分泌調節における一酸化窒素 (NO) の役割を、一酸化窒素合成酵素 (NOS) 阻害剤を用いて検討した。

〔方法〕麻酔下ラットに、① NOS 阻害剤、N-nitro-L-arginine (NNA) 0.625, 1.25, 2.5, 5mg/kg, ② NNA 2.5mg/kg + L-arginine 200mg/kg, ③ NNA 2.5mg/kg + atropine 100 μ g/kg をそれぞれ静脈投与し膵液量、重炭酸・アミラーゼ分泌量に対する影響を検討した。

〔結果〕NNA により、基礎膵外分泌は用量依存性に増加した。NNA で増加した膵外分泌は L-arginine により有意に抑制された。atropine は NNA で増加した膵外分泌を基礎分泌まで著明に抑制した。

〔結論〕NOS 阻害剤 NNA は基礎膵外分泌を用量依存性に促進し、この機序に迷走神経の関与が示唆された。基礎膵外分泌調節において NO が抑制的に作用している可能性が考えられた。

同時性多発胃癌の臨床病理学的検討

(消化器外科)

梁取絵美子・喜多村陽一・小熊英俊・

櫻井 明・鈴木博孝・高崎 健

〔目的〕多発胃癌の臨床病理学的所見からその特徴と治療について検討する。

〔対象と方法〕1968～1994年までに切除した同時性多発胃癌447例を対象とし同時期の切除胃癌6,715例を対

照として検討した。

〔結果〕①多発胃癌は単発胃癌に比して高齢者、男性、分化型、A、M 領域、早期癌、隆起型が多かった。②第1病巣と副病巣の関係は分化型同士、早期癌同士が多く、占居部位は同一、隣接領域が9割を占めた。③多発胃癌の術前診断率は約50%だった。④3病巣以上の多発胃癌における残胃の癌の発生頻度は2病巣の多発胃癌、単発胃癌と比して高かった。

〔まとめ〕多発胃癌は単発胃癌と同様の治療でよいと思われたが3病巣以上の症例では残胃の癌の発生頻度が高く嚴重な残胃の経過観察が必要である。

消化器癌肝転移と Pyrimidine Nucleotide Phosphorylase (PyNPase) との関連

(消化器外科)

桜井 明

〔目的〕消化器癌のうち胃癌と大腸癌における肝転移の危険因子として PyNPase 発現が意義あるものか否かを検討した。

〔対象〕原発単発胃癌肝転移305例と原発単発大腸癌肝転移376例を対象に肝転移危険因子の検討を行った。このうち胃癌、大腸癌肝転移危険群各99例、83例に対し PyNPase 発現の有無を検討した。

〔方法〕抗 PyNPase 抗体を用い LSAB 法による免疫染色を行った。

〔結果〕①胃癌肝転移危険因子は se, 3 型、分化型と考えられた。②肝転移危険群における肝転移症例の PyNPase 発現率は92.3%であった。③大腸癌肝転移危険因子は ss 以深と考えられた。④大腸癌肝転移危険群における肝転移症例の PyNPase 発現率は87.0%、v2v3の頻度は78.3%であった。

〔まとめ〕PyNPase 発現は胃癌、大腸癌肝転移予測の重要な指標であると考えられた。

肝細胞癌における AFPL3分画の検討

(消化器外科)

阪井 守

近年 AFPL3分画が肝細胞癌の診断に有用であることが報告されてきたが、詳細な臨床的検討は未だなされていない。今回われわれは、1997年7月から97年10年までの肝細胞癌切除57例を対象として、AFPL3分画と PIVKII および臨床病理学的因子との関係について検討した。血清 AFP 値、AFPL3分画、PIVKII の陽性率は各々61.4, 36.8, 45.8%であった。L3分画と PIVKII 値に相関関係はみられなかったが、L3分画と臨床病理学的因子との検討により腫瘍径、肝内転移の程度、組織分化度について L3分画の値との間に有意な相関関係がみられた。すなわち AFPL3分画は肝細